

春雨に筆庵に到る

広瀬旭荘

菘圃葱畦路を
取るに斜めなり

桃花多き処是れ
君が家

晩来何者か門を
敲きて至る

雨と詩人と
落花と

【作者】広瀬旭荘(一八〇七〜一八六三年)(文化四年〜文久三年)。江戸時代後期の儒者。豊後ぶんご(大分県)日田出身。名は謙。字(あざな)は吉甫。通称は謙吉。別

号に梅墩(ぼいとん)。広瀬淡窓の弟。亀井昭陽菅茶山(かんちやさん)らにまなぶ。兄の私塾咸宜(かんぎ)園を運営したのち各地を歴遊。文久元年帰郷して雪来館を創立するが翌年摂津池田(大阪府)に移住した。漢詩人としても著名。文久三年八月十七日死去。五十七歳。著作に「梅墩詩鈔」「追思録」など。

【語釈】*筆庵…この時の訪問先。第二句にある「君家」を指すと思われるが未詳。*菘圃…菘(とうな)は唐菜、冬菜、またインゲンナとも呼ばれる野菜。

*葱畦…葱(ねぎ)の畦(うね)、ネギ畑 *取路斜…斜めに辿る路。 *晩来…夕暮れ時。

【通釈】春雨の降る日に、筆庵という友人の家を訪ねた折の作品だ。

菜の花が咲き、ネギが植わった畑のあぜ道。その中を横切つて歩いて行くと、桃がいつぱい咲いているところがあつて、そこが筆庵の家だった、というのである。菜の花の黄色と、ネギの緑、そしてピンクの桃花。その全体に薄いヴェールをかけるように、春雨が白くけぶる。この風景に、和傘をさし、高下駄を履いて歩いている漢詩人を置いてみると、なんとも風流な一幅の絵になるではあるまいか。その春景色を踏まえた上で、後半の2句は、作者と相手との問答になる。「今夜は、だれか門をたたいてやつて来る人はありますか?」「雨と、詩人さんと、散りゆく花だけですよ」

ほかにはお客さんはありません、などとあらわに言ってしまうと、野暮になる。わざわざ尋ねてきてくれた相手を「詩人」と呼び、さらには「雨」と「落花」に挟んで並べるなんて、心憎いばかりだ。雨と花との情趣を解する友人同士が、2人だけで過ごす、ゆつたりとした春の宵。江戸漢詩の風雅な世界である。